

---

# なんでなんでー？ わけわかんないよー

狂狗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なんでなんでー？ わけわかんないよー

### 【Nコード】

N 8 2 3 5 I

### 【作者名】

狂狗

### 【あらすじ】

少女はひたすら問いかけ続ける。

人に、自分に。

ねーねー、なんで、どうして？

一人の少女がひたすら疑問を投げかける話。答えが出ないと気づいた後でも、問いかける事をやめない人間の話。

ねーねー、この世にあるすべてのモノってさー、生きてるんじゃないのー？（前

哲学が嫌いな人には嫌な話かもしれません。

ねーねー、この世にあるすべてのモノってさー、生きてるんじゃないのー？

十歳位の少女が、本を読んでいた。重たそうな図鑑を、目を輝かせて読んでいる。その本のとある一ページを、食らい付くように見つめていた。

ばたん

彼女は閉じた本を胸に抱え、姉の元へと向かった。とてもうれしそうに、きらきらとした目で。

「ねー、おねえ!」

「なんだよ?」

けだるそうな姉に、彼女は笑顔で問いかけた。

「あのさー、この世にあるすべてのものって生きてるのぉ?」

「はぁ?」

「だってさー、人のからだの中に金属あるんだよー、だったらさ、金属って生きてるんじゃない?」

なんかね、キカイも生き物もおなじモノでできてるんだって。だったらさ、こーゆー机とかも生きてるってことじゃない?」

「んなわけないだろ?」

「えー、なんでだよー?」

「知るか」

妹の話に興味を失った姉は、適当にしか返事を返さなかった。

「ぶーぶー、ねえのバカー」

そう言い残した彼女は、母の元へと向かった。

「ねーねー、おかーさん」

洗い物をしていた母は、そのまま洗い物を続けながら娘に返事を返した。

「なあに？」

「あのさー、この世にあるすべてのモノって生きてんのー？」

「……はい？」

娘の妙な発言に、母の手が一瞬止まった。

「だってさー、人もこのへんのモノもおなじものできてんだよー。だったらさー、この世にあるすべてのモノは生きてんじゃないのー？」

「生きてるわけないでしょ」

「なんでだよー」

「そんな事より、ちゃんと宿題やった？」

「んー、まだ」

「早くやりなさい」

「はあーい」

母に怒られたので、彼女は本を持って部屋へと戻った。宿題のドリルを開いて宿題を始めるのだが、ものの数秒で飽きて、机を叩きだした。心の中で不満を言い散らかす。

何でだれもまじめに答えてくれないんだよー。

そういや、つくえが生きてるとしたら、私すごいつくえ引っぱたいてるんだよなー。

わるいことなのかなー？

そう思い、彼女は机を叩くのをやめた。代わりにその表面をなで、その質感を味わう。滑らかなその触感は、磨かれた木の物だ。

たしか「植物は生きていますよ」って誰かがいつてたよなー。

つくえって植物だよー。でもさー、つくえは生きてないっていうんだよね。

おんなじ植物なのに、何でだろ？

傍らに置かれていた図鑑を再び開き、先ほど凝視していたページ

をまた見始めた。そのページの項目は“生命ってなんだろう？”元素の存在を元に、宇宙にある物質は同じ物質である、と言った内容をわかりやすく綴った、短い文章がそこにあった。それを眺めつつ、彼女は再び問いかける。

ねー、なんで？ 何で生きてないっていうの？ 中身はおんなじじゃん、だったら生きてるんじゃないの？

水も土も木も鉄も、人も、おんなじものでできてるなら、みんな生きてるんじゃないの？ なんの差があるの？

ねえ……、何が生きてて、何が生きてないの？

ねーねー、誰かおしえてよ。

ねーねー

ねーねー……

彼女の心の中の問いに、答えるものはいなかった。

ねーねー、この世にあるすべてのモノってさー、生きてるんじゃないのー？（後

今こんな質問はしませんよ、誰にも。

変な目で見られますよ！

ちなみにまだ忙しいです、ちゃんとした連載は期待しないでください。すみません。

あるいみで、むてきだよね！（前書き）

かなり偏った物の見方となっています。

あるいみで、むてきだよね！

七歳位の少女が、椅子に座っていた。彼女は賑やかな教室の中で、何の違和感もなく孤立していた。

周囲の少年少女は彼女に話し掛けようとしないう、また、彼女も話し掛けようとしなかった。何もせず、ぼあっとしていた。

彼女の興味が向かうのは、教室のヒヤシンスが咲くのはいつ頃だろうかと、今日は暑くなるだろうかと、そんな事ばかり。

他人の事など、ほとんどない。

「それでは二人一組になってください！」

先生の命令に従い、他の生徒たちが組を作り上げていく。彼女は立ち上がりもせず、他の人の組が組終わるのを待っていた。

そして、彼女は一人の端数として余った。

「それじゃあ先生と組もうか」

先生の申し出に、彼女はコクリと頷いた。

みんな組みたい人がいるのだから、私が行ったらじゃまになる。そんな事わざわざしたくない、めんどくさい。

だからせんせいとか、ほかのあまった人と組めばいい。せんせいとかあまった人とかがめいわくするような気はするけど、組まなき

やいけないんだからしょうがない。

相変わらず彼女は一人だった。その彼女に、名前も覚えられていない少年が怒鳴り散らしていた。一方的に、これと言った理由もなく。このくらいの年齢の少年では、さして珍しい行動でもない。

「おまえキモいんだよ！」

少女は少年の言葉を適当に聞きながら、どうしようかなあと考えていた。

このうるさい人はどうしたら黙ってくれるんだろう？

「ムシすんなよ！」

「……うるさい」

彼女が小さな声で少年に告げると、少年はまた騒がしくなったのだが、少女はかまわず無反応でいる事にした。

だって反応しただけ反応するから、だまっていればその内あきる。

そうやって無反応で居続けた彼女を、少年が殴った。たかが少年のパンチである、痛いと言えば痛いだが、そこまで痛い訳でもない。彼女に一発食らわせた少年は、そのまま立ち去った。

まんぞくしたのかな？

彼女は、少年の行動はウサ晴らしだと思っていた。日ごろのうつ

ぶんを、自分にぶつけているのだと、そう思っていた。

ある日、彼女は靴を隠された。探そうにも、靴が無くては探しに行けない。靴下だけを履いて、彼女は家路についた。

自分にウサ晴らしをしてそれで気が済むのなら、それで構わないと思って、本気で抵抗もなかった。

べつにいいんだけど、私をぶつても。私がかまんすれば、それで気が済むなら、それでいいんだけど。

やっぱり、うざりたい。ちょっと泣きそうだ。

孤独と言うものを知らなければ、苦痛と言うものを知らなければ、それを味わう事は無かった。

それはある意味無敵の存在。

しかし、いずれ自覚するだろう、自分の中の寂しさに、悲しみに。

彼女も、いつの間にかそれらを知る事になった。周囲の人から様々な感情を向けられた彼女は、自身の中でそれを探し出し、理解しようとした。自分にはあまりに乏しい感情で、良く解らない感情も、何とか理解しようとした。

そう、努力したのだ。

周囲にいるのは家族だけだったのが、彼女の預かり知らぬ間に他人が増えていた。どうでもいいはずの他人が、どうでもいい存在ではなくなり、自身から離れて行く事を恐れた。

だから、自分から皆が離れて行かないように、努力したのだ。他人を理解して、他人の有利になるように動いて、傍にいて欲しい人が傍に居るように。

そして彼女は回想する。

もし、私に誰もよってこなかったら。私はどうなってたんだろうね？ 他人がいなければ、孤独と言うものも知らなかった訳だし。

社会にあらうとした彼女に、社会が押し付けてきたのは社交性。

ねえ、これって本当に必要だったのかな。私、別にこんなものいらなかったよ、なくても幸せに、むしろない方が幸せだったんじゃないの？

楽しい事もあったけど、つらい事の方が多かった、何か大したもののが得られたとも思えない。

あのまま一人でつらい事も知らず、生きていた方が幸せだったんじゃないの……？

彼女は後悔していない。

ただ、あり得たかもしれない今に思いを馳せたただけだ。

あるいみで、むてきだよね！（後書き）

全体的な更新スピード、四月ぐらいまで現状のまま、とっても遅いままになる事が決定いたしました。

……落ちたぜ、チクシヨ！。

いきぐるしい

十八歳位の少女が、寒空の下で深呼吸をしていた。姉に教えられた呼吸練習で、肺の中を残らず入れ替えようとするかのように、冷たい空気を目いっぱい吸い込んで、吐いた。

ああ、息苦しい。

彼女は心の中でぼやいた。誰かに愚痴る訳にもいかず、ひたすら不自然な呼吸を繰り返していた。

あの空気が息苦しいんだ、ピリピリしてて、それでいて上辺だけ取り繕って、痛いつたらありやしない。

彼女は教室から抜け出してきたのだ。受験勉強に励み、不合格に脅えながらも、無理に平静を装おうとする人たちのいる場所。まるで仮面舞踏会のような場所から、抜け出してきたのだ。

私もその一員なんだけどさ。

抜け出してきたとはいえ、またすぐに戻らなくてはならない。彼女もまた、歪みの中の住人なのだから。そこが彼女が自ら望み、彼女の意思でいる、彼女のいなければならない場所なのだから。

でも苦しい、やっぱり苦しい、首を絞められてるみたいだ。

何が彼女の首を絞めているのか、彼女は自分に問いかける。答えは直に出た。

——ああそうか、優しさだ。優しさが、私の首を真綿で絞めるかのように絞め付けているんだ。

彼女は優しさを“真綿”と例えた。柔らかで、暖かで、形が定まらない。そして、思いのほか強いそれが、彼女の首を絞めるのだ。

頭を撫でてくれる手が苦しい、褒める言葉が苦しい、世辞が苦しい、自信を持たせようとする素振りが苦しい、自由をくれる事が苦しい、優しさが苦しいんだ。

苦しくて苦しくて、死にたくなってくる。

彼女は再び大きく息を吸い込んだ。冷たいその空気を無理に吸い込んでしまったため、喉が冷え込み、痛くなった。

呼吸が楽になると、今度は空気が痛くてしょうがない。

真綿で首を絞められている間ならば、こんな痛い空気は吸わずに済むだろう。絞められていなければ、きっと痛くてしょうがない。どちらも人として生きるのに必要不可欠なもの。だがしかし、これらの存在は生きる気力をどんどん奪っていくのだ。

この痛みや苦しみは、どうやったら消えるんだろう。慣れるしかないんだろうか、死ぬしかないんだろうか。

真綿では死ねない。死にたいのなら、自分の手で首を絞めるなり、毒薬を飲むなりしないと。

ああでもやっぱり

「死んじゃだめだよなあ……」

生きている間にやらなければならない事が、まだ沢山あるから。死んでしまう事で無くす物や、周囲に与えてしまう物が多すぎるだろうから。今感じる苦しみも痛みも、ちよつと空気が痛くなり過ぎて、ちよつと首を絞め付け過ぎた、所詮その程度。こんな生温い苦痛で死ぬ事は許されない、死ねやしない。

だったら生きないと

「……もーちよつと頑張るか」

彼女は自分自身の意思で選んだのだ、この場に身を置く事を、この苦痛を味わう事を。環境に流されていたとしても、自分で選んだ事に変わりはない。ならば、その責任がある。

独善で結構、傲慢で結構、我を貫ければそれで構わない。それが私なりの責任の負い方だ。

彼女は背伸びをし、室内へと身を翻した。教室のドアを開け、中に戻る。

そうやって彼女は、刹那の時を生きていく。

ひとりにしないで

五歳位の少女が、一人で立っていた。彼女は華やかなデパートで、じっと立っていた。

はぐれたのだ、母親と。

母親が商品を見て立ちどまっている間、彼女はそのままだち止まらず自分の見たい物を見に行ったのだ。母親は彼女がどこかへ行ってしまった事に気づかず、そのまま商品を見ていた。

どちらも互いが離れた事に気づかず、離れてしまった。

彼女は、迷子だ。

彼女はじっと立っている、母親が見つけてくれるのを待っているのだ。無闇矢鱈と動かない方が、見つかり易いのだと知っていたから、じっとしていた。

周囲を生きかう人は、彼女が迷子だとは気づかない。人待ち顔で不機嫌そうに立っている彼女は、迷子には見えない。

彼女はひたすら耐えていた、孤独と言う名の苦痛に。周囲にいくら人間がいようと関係ない、彼女にとってそれが人でなければ、彼女は独りぼっちだ。

長い時が過ぎた、にじむ涙を堪える。泣けば人間がよってくる、それは嫌だった。そんなものにいちいち応答するのは億劫だった。うつむき、ひたすら人を待つ。

そして、彼女は自分の名が呼ばれるのを聞いた。

母親にかけより、抱きつく。堪えていた涙が零れ落ち、感情のまま喚き散らす。

「ひとりにしないで、っていったでしょう！」

あまりに理不尽なその言葉、命令とも願いとも取れるそれ。

それが彼女の望みの全てである。

## ひとりにしないで（後書き）

余談ですが、私はよく迷子になります。

足音があまりしない上に、人の死角をつくような動きをするから。

原因を人に聞いたらそう言われました。

そんなつもり無いんですけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8235i/>

---

なんでなんでー？ わけわかんないよー

2010年10月8日13時20分発行